

# 『佳人之奇遇』を読む

——小説と現実の「時差」——

## はじめに

政治小説は文学史研究上では近代以前の文学と評価されてきたが、現段階においてもその文学史的位置付けの問題はなお流動的である。筆者は、政治小説の代表作とされる『佳人之奇遇』を研究素材として取り上げるが、これを文学ではなく政治論説の書として扱い、そこで展開される著者柴四朗の政治思想が、近代日本における思想上においていかなる位置付けを可能とするものであるか、という問題を考察していくことを研究課題においている。

近代日本形成期である明治日本人の世界情勢認識がきわめて広範囲にわたり深い内容をもつことは、当時の新聞や雑誌の論説、記事、投書などにみられる通り明らかである。その視野は、欧米列強諸国、これに圧迫され侵略される近隣アジア諸国、そして日本とは直接利害関係をもたない中近東やアフリカの小国をめぐる諸問題にも及んでいる。自らも列強に抑圧されるアジアの一小国であるという認識が、明治の日本にこうした視野の広さをもって世界情勢を捉える姿勢を持たせることになったと考えられる。

## 高井多佳子

明治十八年（一八八五）にその初編が刊行された東海散士（柴四朗）著『佳人之奇遇』は、八編全十六巻、明治十八年から同三十年にかけて刊行され続けた大著である。ほぼ全世界をその舞台とし、同時代の他の小説と比較してみてもそのスケールの大きさでは群を抜いている。小説には強大国に抑圧され蚕食された弱小国の惨状が繰り返し描写され、小国の衰頹、衰亡に至る所以が解き明かされている。そして小説は著者柴四朗によって、この弱小国がすなわち将来の日本の姿を暗示していることを認識して読むよう意図されているのである。この点において明治日本人が向けていた小国への関心と、『佳人之奇遇』が警告する危機との連関性を指摘しておくことができる。

また『佳人之奇遇』は「国権小説」（国権伸張の意識をもち込むことを理想とした政治小説）であると位置付けがなされる場合がある。明治十一年の愛国社再興、同十二年末からの国会開設運動、植木枝盛などによってアジア民族連帯論が唱えられるようになると、対外関係の緊張の中では国権が民権に優位であるといういわゆる「国権論」は一時後退したが、やがて再び国権論が台頭してくることとなった。明治十七年の『自由新聞』紙上における「国権拡張論」は、「欧

窓 州強国ガ未ダ其意ヲ匪細匪東洋ニ逞シウセザルニ当リテ、自ラ進ンデ

我が国権ヲ拡張スルノ手段ヲ行ナハザルベカラズ」と主張した論説である。<sup>⑥</sup> アジアの先進たる我が邦がアジアの衰運を救う行動を起こすべき

であり、そのために官民が調和し、「壯年有志等ノ熱心ヲシテ内事ヨリ  
転ジテ外事ニ向カハシメ、政府ハ則チ之ヲ利用シテ大ニ国権拡張ノ方  
法ヲ計画スベキデアル」と説くもので、自由民権運動とは表裏一体で  
あった国権論が民権伸張論を措いて台頭してきたことを示すものであ  
る。「方今焦眉ノ急務ハ十尺ノ自由ヲ内ニ伸ハサンヨリ寧ロ一尺ノ国  
権ヲ外ニ暢フルニ在リ」(初編巻二)と国権伸張を説く『佳人之奇遇』  
が、この時代背景に呼応するように発表されたのもまさにこの時期で  
あった。

『佳人之奇遇』は、主人公が米国に留学、二佳人と一老志士と邂逅  
し、彼等が抑圧されている民族の解放と独立のために奔走する中で  
様々な出来事が展開していくという目新しい舞台設定のもと、当時の  
日本人の関心および時代背景に呼応した形で登場したことによって、  
「其頃佳人之奇遇という小説が出て字を読む程の者は読まぬ者はな  
かつた」と言われるほどに当時よく読まれた小説となった。<sup>⑦</sup>

著者柴四朗は自らを主人公東海散士になぞらえ、自らの体験を基軸  
として小説を展開させていくという手法をとっているが、その内容  
は、単なる自伝または身辺雑記に留まるものではない。小説は明治十  
五年春の出来事から始まり明治二十八年末を以てその終巻を終える  
が、小説上の設定年代と実際に小説が発表されていく年代との間には  
数年間の時差が生じてくることになる。『佳人之奇遇』を読み進めて  
いく上では、この時差に注意を払う必要がある。その時差は、柴四朗

が『佳人之奇遇』執筆を行う上でどんな意味を持ったのか、それは同  
時代の読者にどう読ませることが意図され、読者はまたどう読んだの  
か。本稿ではこの時差に注目し、『佳人之奇遇』執筆の背景とその構  
造を分析し、柴のもった構想を解明していくとともに、この小説の読  
み方を考察していくこととしたい。構造分析の試みとして、『佳人之  
奇遇』を四段階にわけて論じていくこととする。<sup>⑧</sup>

#### 一 遊学者東海散士から官僚柴四朗へ

1、初編(巻一・巻二)から二編(巻三・巻四)まで

柴四朗に『佳人之奇遇』を執筆させる契機となったものは何であつ  
たのか。まずそのことを知る手がかりとして『佳人之奇遇』自叙(巻  
一)がある。自叙では「散士幼ニシテ戊辰ノ変乱ニ遭逢シ全家陸沈迤  
邐流離、其後或ハ東西ニ瓢流シ或ハ筆ヲ投シテ軍ニ從ヒ、遑々草々席  
暖ナルニ暇アラス」と自らの履歴を述べる。やがて米国留学の機会を  
得て、「専ラ実用ノ業ニ志シ経済、商法、殖産ノ諸課ヲ修ムルニ汲々  
タリシヨリ殖産利用ノ心日ニ長シテ、花月風流ノ情日ニ消シ文ヲ練リ  
詩ヲ咏スルノ余閑ニ乏シ」かつたが、「多年客土ニ在リ国ヲ憂ヘ世ヲ  
慨シ、千里ノ山海ヲ跋涉シ、物ニ触レ事ニ感シ発シテ筆トナルモノ  
積テ十余冊ニ及ヘリ、是レ皆偷閑ノ漫録ニシテ和文アリ漢文アリ、時  
ニ或ハ英文アリテ未ダ一体ノ文格ヲ為サス」という状態であったもの  
を、帰国して六十日程で「本邦今世ノ文ニ倣ヒ之ヲ集録削正シ名ケテ  
佳人之奇遇」と題したと説明している。柴四朗の米国留学は、明治十  
二年一月から同十八年一月に帰国するまでの六年間に及ぶ。自叙によ  
ってその素案は既に滞米中に書かれていたことは明らかであり、帰国

した明治十八年刊行の初編、続く翌年刊行の二編はともに、柴四朗米  
国留学中の見聞の影響が強く出ているとみられる。

『佳人之奇遇』初編（巻一・巻二）は、米国留学中の主人公東海散  
士が、フィデルフィアで二人の佳人（スペイン人幽蘭・アイルラン  
ド人紅蓮）と、一人の老志士（清国人范卿）と邂逅し、それぞれの経  
歴を語りあう展開である。幽蘭はスペインのドン・カルロス党を支持  
する女志士、紅蓮はアイルランド独立運動を後援する女志士、范卿は  
明末の名將瞿氏の部下の末裔で明朝恢復の志を抱く老志士であり、彼  
等とともに祖国を離れることを余儀なくされた亡命者であることを明  
かし、その悲憤を聞いた東海散士もまた戊辰戦争時の会津落城を回想  
し明治日本の危機を語る。

その導入部でスペイン、アイルランドといった国々の国家興亡史が  
語られる小説は、当時他に類を見なかったものであり、当時の読者に  
は新鮮に映ったに違いない。『佳人之奇遇』と題した小説で、重要登  
場人物である二人佳人が何故、スペイン人、アイルランド人でなければ  
ならなかったのか。柴四朗には、『佳人之奇遇』発刊以前に新聞、雑  
誌へ寄せた論説がある。筆者は以前に拙稿でその所在を明らかにした  
が、その論説を見ると、柴四朗の視点は早くからある方向に定まっ  
ていたことが指摘できる。<sup>⑤</sup> 柴は一国の衰頹、衰亡の経緯に関心があり、  
その分析を試みるのである。

スペインについては、明治九年十月二十七日の『東京日日新聞』に  
寄せた「山林ノ材木ヲ伐ルハ国家ノ利害ニ関スルノ論」で確認するこ  
とができる。これは山林伐木の利害得失を論じたものであるが、ここ  
で昔時の勢力が全く衰えた国としてスペインの窮状を例にとる。スペ

インの人心風俗の衰頹は、その経済の悪化に起因する」と指摘し、日本  
もそうなるはならぬという警告を含めた論説である。柴にとってス  
ペインは、大国が衰頹した例として早い段階から注意されていた国で  
あることがわかる。

アイルランドについては、柴四朗が米国留学中、雑誌『東海経済新  
報』に寄稿した論説で取り上げている。明治十四年六月の「貿易論」  
では柴の保護貿易論が展開される。ここで特にアイルランドを取り上  
げその衰頹ぶりを述べているが、この論説をみれば、柴がかなりの共  
感をもってアイルランドを見ていることがわかる。『佳人之奇遇』初  
編（巻一）においても、イギリスのアイルランドに対する過酷な政治  
とその経済政策を説き、強制された自由貿易が後進国の経済的破綻を  
もたらすことを述べ、イギリスの自由貿易を批判、日本の貿易政策に  
ついて保護貿易をとるべきであるとの主張が明確に示されている。

さらに同年十月の同じく『東海経済新報』に寄稿した「英国モ亦タ  
自由貿易主義ヲ廃セントス」においてもアイルランドを取り上げ、イ  
ギリス国内の新聞各紙が続々自由貿易の弊害を論じ、自由貿易廃止論  
を主張し始めたことを述べ、そこで「彼有名ナル愛蘭議院ハーネル氏」  
（Charles Stewart Parnell 1864～1891）の一投書を紹介している。  
柴自身に、パーネルが草したという「激烈慷慨ノ保護税論」に共鳴す  
るところがあったものだろうか、『佳人之奇遇』二編（巻三）にはア  
イルランドの烈女「波寧流女史」（パーネル妹）なる人物が登場し、  
彼女もまた憂国の一人佳人でありアイルランドの問題を語る人物として  
小説中に配されている。

明治日本の危機について、柴は次のように捉えている。初編で散士

窓 語る日本は、「今ヤ外人禍心ヲ包蔵シ神州ヲ蔑視シ、清ハ狼ニ自ラ

尊大、我ヲ輕シテ隣交ニ信ナク、俄独ハ勢威ヲ頼テ驕傲シ、英仏ハ狡

智ニ老ケテ蕩逸シ」という状態であるのに、日本国内では「我人民開

明ノ域ヲ愛シ自由ノ里ヲ慕ヘトモ之ニ達スルノ道ニ迷ヒ」、「米ヲ模シ

欧ヲ擬シ徒ニ理論ニ奔テ実業ヲ勉メス、政令ニ抗シテ自由ノ伸暢ト誤

リ横議罵詈ヲ民権ノ朋党ト誇リ、以テ世俗ノ好ニ投シ譽ヲ当世ニ求

メンコトヲ務メ、後世識者ノ譏ヲ顧ミス虚ニ吠ヘ臭ヲ逐フノ徒靡然響

応シ、土風壞頹徳義地ヲ払ヒ、朝ニ民権ヲ主唱セシ者夕ニ官権ヲ呼号

シ甘シテ轅下ノ駒トナリ、士ニ常操ナク議ニ確論ナシ」という様であ

る。そのため「日本固有ノ国権ハ外人ノ為メニ奪ハレ、吾人幸福ノ利

ハ外商ノ為メニ殺カル、」状態であり、「方今焦眉ノ急務ハ十尺ノ自

由ヲ内ニ伸ハサンヨリ寧ロ一尺ノ国権ヲ外ニ暢フルニ在リ」と『佳人

之奇遇』の性格を決定付ける国権伸張の主張が打ち出される。では、

る。

二編(卷三・卷四)では、幽蘭の父(幽將軍)捕縛の報が入り、幽

蘭、紅蓮、范卿の三人は、幽將軍救出のためスペインへ向かう。一人

残った散士は、紅蓮の紹介で「波寧流女史」(前述)を訪ね、アイル

ランドに対するイギリスの虐政の実状を語り合う。しかし、その後パ

ーネル女史の計報が届く。追弔に訪れた散士は女史の墓前で紅蓮と再

会し、紅蓮はスペインの幽將軍救出劇の顛末を語り始める。

初編に続いてアイルランド問題がこの編でも中核を占める。柴四朗

がここまでアイルランドにこだわったのには、やはり米國留學の影響

があった。柴四朗は、Henry C. Carey 著・犬養毅訳の『訂正圭氏經

済学』の第四版(博文堂、明治二十四年刊)に跋文を寄せ、次のよう

に述べている。「蓋其祖述スル所、多ク圭先生(Henry C. Carey)ノ

論旨ヲ奉シ、經濟ノ要ハ國家ノ形勢如何ニ依リテ斟酌應用スベキモノ

また二編(巻三)には一挿話として、散士がフランクリン墓畔で一人と邂逅し、ポーランド滅亡の所以と英雄コシュューシヨ(Kosciuszko 1746~1817)の活躍を語る場面が挿入されている。ポーランドが滅亡したのは、「抑彼民ヤ自由ノ理ヲ誤リ、一身ノ自由ヲ以テ無上ノ自由ト為シ、国家独立ノ自由更ニ貴キヲ悟ラス」、そのため「外患アルノ日ニ当テ、人人独立ノ志ヲ忘レ徒ニ一身ノ自由ヲ嗷嗷シ国ニ死スルノ義ヲ以テ一身ノ自由ヲ傷クト為シ、其極ヤ貴族ハ下民ヲ凌キ下民ハ貴族ヲ怨ミ、政權下ニ達セス民情上ニ通セス尾大掉ハス」という状態となつてしまつたため、「遂ニ魯普澳三国ノ為メニ分轄」されるに至つたと説く。内争の結果、強国の乗じる隙が生まれ、また自由の誤解が国を滅亡に追い込んだのであり、「自由ノ誤解豈深ク鑑ミサル可ケンヤ」と述べるのである。ここで柴は、一身の自由より国家独立の自由が優先されるべきであると主張し、自由の誤解をする者(つまり日本における自由民権論者)に対して警戒の念をいだいていることが伺える<sup>⑥</sup>。このような小国滅亡論はこれ以後も国をかえて繰り返し論じられる。柴が『佳人之奇遇』で再三試みているのは、弱小国の惨状およびその亡国の所以を明らかにし、読者にその問題を日本の現状に引き寄せて読ませることによって、日本にも迫りつつある危機を警告していくという手法なのである。

初編(巻一・巻二)および二編(巻三・巻四)は、柴四朗が米國留學中に日本の外から世界情勢を分析、強国に虐げられる弱国の末路、日本の置かれている立場を見据え、日本もこれらの国と同じ過ちを犯して滅亡に至ることがあってはならず、そのため日本人に向つて危機意識を啓発していくことを目的として執筆されたものであるとみるこ

とができる。ここで主張される論は、柴四朗の米國留學の成果が凝縮され発露されたものであると読まねばならない。

## 2、三編(巻五・巻六)から四編(巻七・巻八)まで

三編刊行(巻五・明治十九年八月、巻六・同二十年二月刊)前に柴四朗に大きな身辺の変化が起こる。明治十八年一月に柴が米國留學を終えて帰国してからの事歴は、『佳人之奇遇』五編(巻十)で知ることが出来る。いま巻十でこの時期を追つておくと、朝鮮国の京城で甲申事変が起こり(明治十七年十二月)、日本と清國の両国間は緊張状態であるにもかかわらず、帰国した散士(柴四朗)が目にしたのは、日本国内の「上流者歌舞遊樂之レ耽リ恬トシテ知ラザルガ如シ」という状態であつた。散士は、ある時は「縉紳」を訪ね、ある時は「畏友」と、ある時は亡命してきた金玉均(一八五一~一八九四)と、盛んに朝鮮問題、東洋の時事を議論する機会をもつた。清國が「歐ノ雄邦仏國ヲ敗リ東洋ノ強邦日本ニ勝チ朝鮮ニ於ケル旧權ヲ恢復セリ、宇内又恐ル、ニ足ルモノナシト勇氣百倍病獅再ヒ風ニ嘯ク態アリ」というのに対して、日本は「通貨縮蹙人民窮厄ノ歎ノ聞クノミ、能ク外事ヲ説キ國威ノ伸縮ヲ以テ念頭ニ措クモノニ至リテハ寥寥晨星ノ如シ」という様であつた。翌年十二月には政府に大改革が行われ、柴四朗とは数年来の知己である谷干城が入閣し農商務大臣となつた。谷は、すでに早く、『佳人之奇遇』初編(巻一)「引」に、「嗟乎使此有用之才不能施之事業、纔借筆墨以洩其志者抑誰之咎也」との言を寄せており、柴四朗を高く評価していたことが知られる。この谷が軍事視察を名目とした欧州視察旅行に随行することを柴に要請したので、

窓 同十九年二月に柴四朗は農商務大臣秘書官に任ぜられ、官命を受けて

歐洲に赴くこととなった。この視察旅行には、明治十九年三月から翌二十年六月までの一年余を費やした。柴は洋行先でも『佳人之奇遇』執筆を続けたのであり、三編(巻五・巻六)はこの洋行中に成ったものである点に注意しなければならない。

三編(巻五・巻六)は紅蓮の語りの続きから始まる。幽將軍奪還に成功した幽蘭、紅蓮、范卿、そして幽將軍一行四人は、追っ手を逃れイタリヤへ入り、カブレラ島にガリバルディ(Giuseppe Garibaldi 1807~1882)を頼ろうとしたが、既にガリバルディは死亡しており、一行は船上からその死を悼む半旗を見ることになる。そこでフランスに赴き、ガムベッタ(Leon Gambetta 1838~1882)を頼ろうとするが、その途中で嵐に逢い難船、紅蓮は救出されるが他の三人は消息不明となってしまう。その後、紅蓮は単身フランスにガムベッタを訪ね、アイルランド、日本の事などを語り合った後、執拗に迫るスペインの追っ手を逃れ、アメリカに渡ってきた経緯を語る。一日、散士と紅蓮は、新聞でエジプトのアラビー・パシャ(Arabi Pasha 1839~1911)の挙兵を知る。さらに記事によれば、アラビー・パシャの幕賓に幽將軍父子らしき人物のあることを知り驚愕する、という展開である。

この三編でも主人公東海散士は米國留學中という設定であるが、さきに述べたようにこの編が書かれたのは、柴が農商務大臣秘書官として官命を受けての洋行中のことであった。ここで小説上と現実との間に四、五年の時差が生じてくることになるが、前編にひき続き、自らの米國留學時代を舞台としながら、三編以降ではこの洋行体験で得た知見をふんだんに盛り込みつつ、小説が構成されていくことに注意を

要する。

この編では柴の日本人批判が展開される。フランスの政治家ガムベッタに日本の現状に対する不満を語らせる箇所がそれである。ガムベッタに「日本人民ニシテ上下心ヲ一ニシ真ニ國權ノ振ハサルヲ概シ真ニ外人ノ專横ヲ憤リ、昔時米國ノ義拳ノ如ク聖土奴民嗷ノ獨立ノ如ク愛人カ英政ニ敵スル如ク、百折撓マス千挫屈セス志氣愈振ヒ民心益固クンハ、余亦其孤忠ニ感シ一臂ノ勞ヲ尽ス可シ」と言わしめる。さらに日本には「条約改正ノ成ラサルヲ憤リ慷慨激昂自ラ政府ニ迫リ之ヲ論スル者」、軍備を装うも内乱を鎮圧することのみ汲々として「海岸ニ砲壘ヲ増シ外寇ヲ防禦セント欲スル」者、「上一致全力ヲ國權恢復ニ尽シ、若シ歐人ニシテ日本ノ正理ヲ承諾セスンハ、断然獨立國ノ体面ヲ保持セント欲スルノ決意アル」者、在野の名士で「奮然臂ヲ揮テ歐米ニ航シ、条約ノ偏重ヲ各國ノ君相ニ訴フル者」、志士論客で「此土ニ來リ筆ヲ擲リテ書ヲ新聞ニ投シ舌ヲ掉フテ公衆ニ演説シ以テ輿論ヲ傾動スルモノ」、「全國ノ民才ヲ択ヒ能ヲ選ミ使ヲ遣シテ書ヲ各國ノ議院ニ奉ケ以テ条約ノ改正ヲ請求スル者」があるのを未だ聞かない、日本人は「國家獨立ノ実力ヲ傷ケ自治ノ大權ヲ失ヒ外人ノ鼻息ヲ窺ヒ他邦ノ虚喝ヲ恐レ、三千余万ノ衆上下恬然トシテ愧ツル所ヲ知ラス、内結外競ノ大計ヲ遺シ互ニ相語テ曰ク、自由ノ為メニ斃レンノミ、國權ヲ拡張セサレハ死モ且ツ曰マスト、之ヲ小蛙ノ井底ニ躍ルニ譬フ」と痛烈な批判をさせるのである。『佳人之奇遇』全編を通じて繰り返される柴の立論の一つに日本には「人物」がいないとするものがある。現実の日本政府に近付いたことで改めて得た実感であったものか、そのため柴は殊更に各国の英雄を取り上げ本編の随所に配す

る。そしてそれは単なる英雄譚の紹介に留まるのではなく、そこには民族・国家の「独立」のために闘った英雄の功績を語るることによって、日本人の奮起を促そうとする意図がある。

この編ではイタリアの民族統一を行ったガリバルディ、黒人初の共和国サント・ドミンゴの指導者トゥサン・ルーヴェルチュール(Toussaint Louverture 1743~1803)として「エジプト人のエジプト」を恢復するためイギリス軍と闘ったエジプトの将軍アラビー・パシヤを取り上げている。とくにトゥサン・ルーヴェルチュールおよびサント・ドミンゴの問題について取り上げたものは、当時では『佳人之奇遇』を唯一の文献として他に例をみないのではないだろうか。柴の視野の広さが何われ高く評価されるべき点である。

続く四編執筆の背景にも注意が必要である。洋行後、谷干城は従来より一層政府批判を強めて帰国、内閣に政治外交政策刷新の意見書を提出し農商務大臣を辞職した。秘書官であった柴四朗も同じく辞職、その後は駿河興津の清見寺に住居し、『佳人之奇遇』四編はここで執筆されたのである。

四編(巻七・巻八)では、散士と紅蓮のもとに女の客が来訪する。客はエジプトにある幽將軍父子の無事を告げ、アラビー・パシヤ軍の戦況を語る。また客は、以前(巻三)散士がフランクリン墓畔で邂逅した一士人コシュート(Kossuth Lajos 1802~1894)の娘であることを明かし、紅蓮に請われるままハンガリー独立戦争の闘争史を語り始める。

この編の大半を占めるエジプト人アラビー・パシヤとハンガリー人コシュート・ラヨシュという二人の人物には、柴自身が欧州視察旅行

中に面会を求め実際に話を聞いている。

アラビー・パシヤとは、柴は谷等と共にセイロン島で面会している。谷にはこの洋行を記録した『洋行日記』が残っているが、同日記の明治十九年四月三日条には、「エジプトの敗将アラビーパシヤを訪ふ、種々慷慨談あり」とある<sup>⑥</sup>。このアラビー・パシヤとの会談場面は六編(巻十二)で描かれる(後述)<sup>⑦</sup>。

コシュート・ラヨシュには、明治二十年三月三十日、柴四朗が単独でイタリアのトリノで面会している。やはり谷の『洋行日記』に、「柴氏は匈牙利人コウシと云ふ人に面会の為め山には行かず、此人四十年匈牙利の独立を計り兵を挙げたる時の巨魁にして有名なる人なり、今年八十四猶壯健なりと云ふ、著述もあり、子息二人皆以、国に仕ふと云ふ」とありこの日付が明らかとなる。恐らく柴は、コシュートと面談した唯一の日本人となるのではないだろうか。この時、実際に二人が何を話し合ったかは未だ明らかにし得ていないが、コシュートと柴の会談場面は七編(巻十四)に描かれる(後述)。

柴四朗は自身の興味、関心のもとに積極的にこの洋行を利用し、そこで得た知見を自著『佳人之奇遇』の素材として巧みに配していった。実際に逢った人物を描くのであるからそれは現実感を持ち、読者により強い印象、説得力をもって読ませる効果もあった。アラビー・パシヤもコシュートも当時の日本人が深い関心を寄せていた人物であったことは、当時の新聞、雑誌にその名前が度々みられることから明らかである。そのような人物を小説上に登場させ語らせることによって、自身の主張するところをより明確に鮮明に打ち出していく柴四朗の手腕は評価すべき点であろう。

窓 またこの編のうち巻八には柴自身が重要な意味を持たせている。巻

八でコシュートの娘によってハンガリー闘争史が語られる場面では、

オーストリア政府の政策を攻撃することに仮りて、或いは宰相メッテルニヒの反動政治を非難することに事寄せて、実は日本政府の政情、当路者を描写し攻撃することにすりかえている。この部分では、『佳

人之奇遇』鼈頭の評者の言にも「余読至此。不覺大呼曰。似哉似哉、何其相似之甚也。」とあり、これによって読者もまた現日本政府および当路者（ここでは伊藤博文）を想起しながら読むことになるよう仕

組まれているのである。<sup>⑩</sup> 明治二十五年二月、柴は第二回総選挙に当選し福島県第四区代議士となるが、選挙に出る際にこの巻八を自らの

「政治上の意見」であると述べ出馬している。<sup>⑪</sup> 柴には最早、小説上の展開よりも自身の政治論説の表明が重要となってきたことが明らかであり、自らの「政治上の意見」を論じる場として『佳人之奇遇』

を徹底して利用したものとみられる。

五編（巻九・巻十） 刊行は明治二十四年十二月で、前編刊行（巻七・明治二十年十月、巻八・同二十一年三月）からやや時が経過して

いる。この事情については五編で柴自ら序文をつけており、それに詳しい。その序文によれば、二十二年の冬に原稿は完成していたのだが、友人の不注意からこの原稿が失われてしまい、再び執筆し刊行し

ようとした時には大津事件が起こり（明治二十四年五月十一日）、出版の自由を失い、その日に及んだとある。やはりここに生じることになった時差にも注意しなければならない。

この時期の柴四朗の動向をみてみると、明治二十一年十月、『大阪日報』を『大阪毎日新聞』と改題して発行、柴はその主筆に就任して

いる。さらに同年十二月には、大阪で政治雑誌『経世評論』を創刊した。<sup>⑫</sup> しかし、『大阪毎日新聞』では主筆就任当初から株主との衝突があり、存分に政治を論じることが出来なかったらしく、翌二十二年五月には柴は大阪毎日新聞を退社している。雑誌『経世評論』もまた経営が思わしくなかったものか、詳細は不明であるが、恐らく一年余りで廃刊したものとみられる。この時期の柴には、新たに得た言論活動の場では満足のいく成果を挙げることができなかった背景があったことを踏まえて、この五編の意味を捉える必要がある。

五編（巻九・巻十）では、幽蘭がエジプトにあると聞いた紅蓮がエジプトへ赴くことを決心し、父コシュートのもとへ帰るといふ客と共に散士のもとを去る。散士は数日してエジプト、アラビ軍の敗北を知る。秋に入り、父死去の報せ（柴四朗の父佐多蔵は、明治十五年九月六日死去）を受け取った散士は、東洋列国を遊説し、興亜の策を定めんと志す。ニューヨークでは一釈師と出逢い世界状況を論じた。一日、「白雲山下ノ客」（実は范卿であることが後に判明）と署名のあるアジアの将来について策を授けた書簡を受け取る。その後メキシコに赴き、メキシコが成し遂げた条約改正の成功を新聞記者数多と語った。そして明治十八年一月帰国、その後は前述した通り、谷干城に随行する洋行出発までが描かれる。

この編の中核をなすのは、朝鮮問題、アジア問題に対する散士の論策の表明である。「東洋列国ヲ連衡シ以テ西洋諸邦ト頡頏セント欲セバ、埃及ヲ以テ其鎖鑰トナシ坐ナガラ地峽ヲ拒ガシメ、印度ヲ以テ其藩屏トシ進ンテ亜典ノ要害ヲ奪ハシメ、土耳其ヲシテ奮テ北向黒海ヨリ強露ノ横ヲ窺ハシメ、英露ヲシテ猜忌相争ヒ以テ歐人ヲシテ歐人ヲ



攻メシメ、而シテ我国清国ト相合シ小邦ヲ率ヤテ其背ヲ拊タザル可カラズ」、「東洋列国ヲ連衡シ、印度ヲ助ケテ独立タラシメ埃及馬島ヲシテ英仏ノ干渉ヲ絶タシメ朝鮮ノ独立ヲ保護シ清国ト連合シテ、遠ク露人ヲ退ケ亜細亞洲中欧人ノ鼻息ヲ納ルナカラシメ、屹然宇内ヲ三分シ亜欧米鼎立シ武ヲ偃セ道ニ仗リ人生安楽四海平和ノ大業ノ基ヲ建ツル」などをはじめとするこの編に現れる論策は、この時期の柴のアジア認識の論として重要である。その論の分析は本稿ではひとまずおいておくが、柴四朗が生涯関わることになる朝鮮問題、および柴のアジア観が、この編以降鮮明に打ち出され『佳人之奇遇』の主題となっていく。清韓兵による襲撃に対して「方今ノ国是ハ唯果斷勇往ニアルノミ、此激昂セル国民ヲ驅テ之ヲ指揮セハ水火モ踏マシムベシ」（卷十）というような露骨な主張が述べられ、ここに至って柴は専ら日本はアジアをどう導いていくべきか、といった問題、国策を論じていく場として『佳人之奇遇』を扱っていることが明らかである。

以上ここまで『佳人之奇遇』をみてくると、そこで描写される事象は過去の出来事でありながら、柴の視野には常に現在の日本があり、自らの政治思想を論じるための手段として小説を利用したこと、そしてその視勢は巻を追うごとに明確となっていく経緯が見て取れるのである。

## 二 政治家柴四朗

1、六編（卷十・卷十二）から七編（卷十三・十四）まで  
五編刊行後、六年間刊行が見られなかった『佳人之奇遇』は、明治三十年になって六編（卷十一・卷十二）から八編（卷十五・卷十六）

までが刊行された。それまでの刊行のペースと比較すると明らかに異常事態といえる。六年のブランクを経て一挙に三編六巻の刊行を見た背景には何があったのか、以降の編を読み進めるためにはこの背景を踏まえることが必要となる。

すでに触れた通り、明治二十五年二月に柴四朗は第二回総選挙で代議士に当選した。柴の代議士生活についてはいづれ稿を改めて論じることとしたいが、いま事実関係のみを追っておくと、同二十七年三月には第三回総選挙当選、この頃から再三朝鮮国に出入りするようになったとみられる。その様子は本文中に「散士、清国膺懲、朝鮮扶植ヲ唱呼スルヤ年アリ、是ニ於テ其風雲漸ク將ニ急ナラントスルヲ見テ、孤劍鷄林（朝鮮）ニ入ル（中略）、散士鷄林ニ入ルモノ一歳四回、微力ヲ王師ノ征清ト朝鮮ノ独立トニ致サント欲ス」（卷十六）と説明している。同二十八年九月、井上馨のあとを受けて三浦梧楼が朝鮮国駐在公使となると、柴は顧問の一人として朝鮮国に入った。そして間もなく十月八日の事変が起こり、三浦以下柴も含めた四十九名の関係者は閔妃殺害に関与したとして、帰国後、凶徒囂集謀殺罪で広島に投獄された。翌二十九年一月二十三日には三浦以下一同は証拠不十分で免訴となった。『佳人之奇遇』の一挙三編刊行をみたのはこの翌年である。

六編および七編では、明治十九年三月から一年余を費やした欧州視察旅行が小説の舞台となる。ここに至ると小説と現実との時差は約十年となる。これだけの時差を超えて柴は何を述べるのか。ここでは明治三十年になって『佳人之奇遇』三編六巻が一挙刊行されたその意味について述べておく。

六編(巻十一・巻十二)は、香港出港後、散士が船中で范卿と再会するところから始まる。范卿は難船後、フランス軍艦に救助されたこと等これまでの経緯と明朝恢復の志を語る。船がセイロン島に着くと、谷、散士は、エジプトの敗将アラビー・パシャの居を訪ね、エジプト亡国の原因を尋ね日本の将来に備えようとする。またエジプトで幽蘭と再会するも、散士は官命を帯びた洋行中の身であり行を共にすることはできず、幽蘭には早く危険の地を脱するようすすめ別れる場面までが描かれる。

この編でも小国滅亡の原因が論じられる。リベリア共和国とマダガスカル島を例にとり、「噫皮相ノ欧化ハ其レ国ヲ誤ルノ原乎」と述べ、欧州列強諸国が武力だけではなく「詐術」を以て、思想的にも経済的にも弱小国を追いつめ併合していくことを繰り返して説くのである。

前述したアラビー・パシャとの会談場面はここで描かれる。やはり欧州人がエジプトを欺く二つの手段としてとった宗教と外債の問題をあげ、遂には武力で国を制圧してしまうことをアラビー・パシャに語らせ、それを聞いた谷と散士は日本のために寒心し欧州崇拜の過ちを悟るといふ場面である。これまでもエジプトの悲劇は繰り返し登場するが、ここで改めて「敗軍ノ将」の口からその亡国に至った原因を語らせることによって、その主張するところをより強調する効果をもたせている。

七編でも欧州視察旅行を描くが、ここで注意しておきたいのは柴四朗は漫然と旅行記を描いているわけではないという点である。柴によって注意深く作意された結果、描く必要がある日本人に伝える必要があると判断された国が抽出されて取り上げられている。柴は七編(巻

十三)を「散士欧州各邦ヲ歴遊シ其文物典章ヲ周覽シ、将ニ多惱河ヲ下リ匈都仏陀ヲ経テ馬留関ノ形勢ヲ巡視セントス」と始め、実際の行程でエジプト出国後に立ち寄った、フランス、スイス、ドイツ、オーストリア等いわゆる大国の状況については全く触れない。谷千城の『洋行日記』と比較するとその差異は明らかで、『洋行日記』では、軍事視察を名目としていたことも関係しているのであるが、これらの国々にはかなりの記述がある。『洋行日記』と『佳人之奇遇』の比較検討作業を通じて、それぞれの問題意識の所在が明らかとなり得ると考えている。

七編(巻十三・巻十四)では、谷一行はトルコで名将オスマン・パシャ(Osman Nuri Pasha 1837~1900)と会談、その後、散士はコーカサスの地でロシアによるコーカサス経略を回想し、これに反抗した英雄シャミール(Shamir 1797~1871)を思う。やがてギリシアからローマへ入り各地を見学した後、散士は一人トリノへ赴きコシユートの居を訪ね、条約改正問題に関して意見を請い、世界情勢について議論を交わす。その後、ロンドンで傍聴した国会の様子を描く。

『洋行日記』によれば、明治十九年十二月三十一日に谷一行はトルコでオスマン・パシャと会談している。『佳人之奇遇』ではオスマン・パシャに「遂ニ一家ノ内仏派独派英露ノ党アリ、以テ互ニ相擠排スルニ至ル、突厥ノ大患ハ実ニ此ニ在リ、貴国ノ如キ幸ニ国人ヲシテ外国党派ヲ作ラシムル勿レ」と忠告させて、大国トルコの衰頹の要因をここに求めているが、『洋行日記』によれば、「貴国の如きも成る丈け外国人を雇ふ事を止むべし」と谷等に忠告したのは、トルコの一少佐であることが記されている。ここでも柴は意図的に高名な将軍オ

スマン・パシャを利用することで自らの主張を強調しているとみられる。<sup>④</sup>

この編で最も特徴的なのは、ロシアの動きを警戒する発言が随所に挿入され、ロシアの脅威が強調されてくることである。オスマン・パシャの言として、ロシアの雄略と国是の不動が指摘され、これに日本も備えるよう忠告を受けたことを描き、コシュートの言にも日本が一番に警戒すべきはロシアであるとあり、散士とコシュートによるロシア論が巻十四の大半を占める。ここでは日清戦争後、三国干渉を経過し日露戦争に向かう明治三十年当時の日本の状況を踏まえて読まねばならない。

コシュートとの会談では、散士が条約改正問題についてコシュートに意見を求める形になっているが、これも柴の意図するところは別にある。コシュートはその質問に答えるため、フランス、イギリス、ドイツ、イタリア、スペイン、ロシアの「現勢」を論じるが、この「現勢」は柴洋行中の明治二十年頃のものではないことは明らかで、表面上は条約改正問題という過去の問題に仮りて、やはり明治三十年当時の外交方針を考える上での柴の意見表明となっているのである。さらにコシュートとの議論はイギリスとロシアの比較論に及ぶ。「露ノ信スヘカラサル、英ヨリ甚タシキモノアルヲ恐ル」、「英ハ傾カントスルノ夕日ナリ、其熱炎タタルモ猶忍フヘシ、露ハ将ニ昇ラントスルノ旭曦ナリ、其光未タ灼灼タラス遂ニ人馬ヲ燦銷セン、是レ実ニ事歴ノ吾人ニ教フル所タリ、豈親ムヘケンヤ、豈親ムヘケンヤ」と、今や日本が注意すべき対象がロシアとなっていることを警告するのである。述べてきたように、明治十年代後半から二十年代前半においては、

日本が注意すべき相手は欧州列強であったが、日清戦争を経過した日本には新たな危機（ロシアの脅威）が迫りつつあった。これを日本人に訴えなければならぬというのが、柴四郎がこの編に着手した最も大きな動機であったとみられる。柴はその手段として『佳人之奇遇』を利用することが最も効果的であると考えたのであろう。

## 2、八編（巻十五・巻十六）

八編も同じく明治三十年刊であるが、この編を独立させて論じるのは、ここでまた内容の趣が変わることによる。同年に刊行されているものの、前編までは欧州視察旅行を題材としていたものが、この編では明治二十年から同二十八年までが描写され、これまでであった小説と柴執筆時点との時差を一举に引き寄せる試みが為されていることに注意を要する。

八編（巻十五・巻十六）では、欧州視察を終えアメリカに向かう船中で、散士は紅蓮と再会、互いにこれまでの経緯を語り合う。明治二十年六月帰国後、谷が条約改正交渉反対と伊藤内閣の施政を批判した意見書を提出し農商務大臣を辞職すると、散士もこれに殉じて辞職した。同二十四年春、范卿の同志である清国人鈕叔平の密使・朱鐵が散士を訪ね、挙兵の計画があることを告げる。散士はこの挙を中止させようとするが時既に遅く、鈕叔平は捕吏の手にかかり死亡した。<sup>⑤</sup>同二十七年、日清戦争が勃発、この頃より微力を「征清ト朝鮮ノ独立トニ致サント欲」して、数回朝鮮国入りを果たす。一夜、交友十余人を招き観月の宴を開き時事を論じた。三国干渉後、三浦梧楼が朝鮮国駐在公使に着任し散士も同行するが、間もなく十月八日の事変が起こり、

窓  
帰国後、広島に投獄された。ある夜、散士の枕頭に李豊榮と金玉均が  
あらわれて、李が金に冤罪を訴えているのを聞きながら、散士が疎然  
として驚き目覚めると、それは獄中の一夢であり、暗闇の中に聞こえ  
るのは巡視する警官の靴音と剣の響きのみであった、という場面で  
『佳人之奇遇』八編全十六巻はその物語を終える。

この編では時間が一挙に経過するため史実的出来事の羅列が多い  
が、柴がここでこのような手法をとったのは、とくに訴えておきたい  
ことがあったためと考えられる。その第一は谷干城の意見書提出の背  
景に触れておくことであった。この意見書は提出当時は秘密出版とい  
う形で流布したが、柴には改めて自らその真実を述べる必要があっ  
た。条約改正交渉反対と時の政府批判を表明した谷の意見書作成に  
は、柴四朗も関与していたと見られる。若干の異同はあるもののほぼ  
意見書の全容を述べていることから谷と柴は意見を同じくしていた  
ことは明らかである。

日清戦争について柴は、「蓋我国振古以来、兵ヲ海外ニ出スモノ少  
シトセズ、而シテ其遺算ナク鴻功偉烈、未タ斯ノ如キ大捷アラザルナ  
リ、然レトモ退キテ細ニ之ヲ尋積スレハ、是レ范卿カ十余年前ノ猷策  
ト符節ヲ合スルカ如シ、嗚呼亦奇ナリト謂フヘシ」(巻十六)と述  
べ、既に五編(巻九)で述べていた自らの論策との符合をここで述べ  
ている。また京城での観月の宴席で交友と時事を談論する場面では、  
八人にそれぞれの意見を述べさせ、それが戦後の輿論を総評するもの  
になっている。

十月八日事変の真相を語ることもこの編執筆の大きな動機となっ  
た。明治二十九年二月二十三日から三月一日の『東京朝日新聞』「八

日事変の原因」は、「明治廿八年十月八日の朝鮮京城事変に關係深か  
りしと云ふ柴四朗、国友重章の二氏が同事変に付て語る所」を録すと  
した連載で、「少しく朝鮮政治上の真相を知るものハ此変の実に已む  
を得ざるに出たるを認めざるハなし」、「世人ハ宜しく此事變の裏面に  
ハ日本及び朝鮮の国勢上、東洋の平和上、一大禍機の陰々として潜伏  
し居たることを記憶せざる可らず」、「帝國政府当初の宣言を如何に  
するか、帝國々民の此に満足せざるハ勿論、朝鮮の独立帝國の面目及  
び利益東洋の平和を挙げて之を他人の蹂躪に帰せざるべからず、左レ  
バ此危機一髪の際に際し当局の外交官が其身を犠牲にして匡済手段を  
執るハ萬已むを得ざるに出でたるものと信するなり」と、この事変が  
やむを得ず起こったことであり、日本とロシアの衝突は避けられない  
ことを述べる。「我々ハ更に明言せん」と欲する所なきに非ずと雖も外  
交上聊か憚る所あるを以て暫く沈黙を守るべし、乞ふ世人之を言外に  
察せよ」と記事は結んでおり、これが翌三十年刊行の八編につながっ  
たと考えられる。

『佳人之奇遇』終巻に散士がみた夢で、金玉均に冤罪を訴えている  
李豊榮(周会)は、明治二十九年二月に閔妃殺害の罪で刑死した人物  
である。李が十月八日事変の罪を負わされたことに対して冤罪を訴え  
日本政府の態度に異を唱えている姿に仮りて、柴は自らの冤罪を訴え  
ていることは明らかである。最後に金玉均に「老子曰ク天下ノ至柔ハ  
天下ノ至剛ヲ馳騁スト、余唯国家ノ為メニ一脈ノ望ヲ繫ク所以ノモノ  
ハ、朝鮮ノ至柔能ク強國至剛ノ間ニ介立シテ祀ヲ存スルヲ望ムニ在  
リ、是レ天機ナリ漏ス可カラス」と言わせ、朝鮮国の将来に望みをつ  
ないで柴は擱筆する。以後の柴四朗がとる行動を追わねばならないが

これについては別の機会に譲る。

八編に至るとその内容は柴の体験した出来事のみで構成され、終巻に至っては対朝鮮政策の表明と自己の弁明に終始してしまい、ほとんど小説の体は成していない。「過去の傑作が、その名声の尾について蛇足的に続いた」とみるのが『佳人之奇遇』に下された同時代の最終的評価であったが、確かに小説作品としてみるならばその評もやむを得ないものがあるといわねばならない<sup>⑨</sup>。しかしながら、果たして柴四朗に小説を作ること、またその評価を得ることに意味はあったのかという問題はいま一度問い直す必要がある。やはりこの年一挙に刊行に踏み切った柴四朗の意志とその主張するところを重要としたい。柴には政治を論じる場が必要であった。それが「政治小説」という名を仮りた『佳人之奇遇』であったのであり、それが小説として文壇にどう評価されるかは柴の意図するところではなかった<sup>⑩</sup>。

### おわりに

以上、『佳人之奇遇』執筆の背景について述べてきた。本稿では小説上の設定年代と、現実に柴四朗が執筆していく年代との時差に注目し、それが『佳人之奇遇』各編においてどのような意味を持つものであったのかを中心に論じた。扱われる事象は数年前の過去の世界と日本の姿であるにもかかわらず、実は今現在の世界情勢の中で日本が置かれた立場、日本の現状を見据えた同時代史であり、柴四朗の政治的意見表明の場であるという視点をもちて読まねばならないことを述べた。次の段階として当然そこに展開される柴四朗の立論の分析が必要となる。近代日本の政治思想史上、『佳人之奇遇』および柴四朗の政

治思想はどのように位置付けられるのかを論究していくことが筆者の次の課題である。

### 註

- ① 柳田泉「政治小説の一般(二)」、『明治文学全集6』(筑摩書房、一九六七年)。  
また松井幸子『政治小説の論』(桜楓社、一九七九年)では、それまでの政治小説の自由民権―国内的政治権力―対外的国権の伸張という直立発展図式が、『佳人之奇遇』的な考え方によって、対外的国権と民権という並立図式に形を変え、「対外的国権の政治小説中の別派の動き」が生まれたとする。
- ② 『自由新聞』明治十七年九月三十日・十月一日・四日・五日。
- ③ 徳富蘆花『黒い眼と茶色の目』(大正三年十二月刊)。
- ④ 『佳人之奇遇』全編を取り扱う先行研究には、柳田泉『政治小説研究上巻』、『明治文学研究 第八巻』(春秋社、一九六七年)がある。
- ⑤ 拙稿『東海散士柴四朗の政治思想―政治小説『佳人之奇遇』発刊以前―』(『史窓』第五十六号、一九九九年)。
- ⑥ 柴四朗は日本での自由民権運動最盛期に米國留學中であつたため、日本の自由民権運動への理解、把握に若干乏しい面があり、それが自由民権論者への冷淡な態度につながるのではないかという指摘をしておくことができる。
- ⑦ ガムベッタは普仏戦争(一八七〇―一八七二)では愛國主義の立場から強硬抗戦論を主張した。戦後は共和派の指導者として下院議長、首相をとめた。
- ⑧ 日本史籍協会編『谷干城遺稿 二』(東京大学出版会、一九七五年)には、アラビー・パシヤとの会談の内容については「別に記す」とありその詳細は現段階では不明である。
- ⑨ 柴は特にエジプト問題にはこの後も深い関心を寄せ、後にそれは『埃及近世史』刊行(博文堂、明治二十二年十一月刊)という形で結実することになる。

⑩ この評者は無記名で特定できない。『佳人之奇遇』自叙に、「唯憾ムラクハ驚頭ノ論評ハ多ク内外諸名士ノ筆ニ係ルト雖モ憚ル所アリテ茲ニ其姓名ヲ掲クル能ハサルノミ」とあって、複数人が存在するらしいが、恐らく柴が自身で評をつけることもあったのではないかと筆者は考えている。

⑪ 『日本』明治二十五年一月三十一日。記事「東海散士、奥の会津の候補者たり、一日、政治上の意見を述べて曰く、予が意見は佳人之奇遇第八巻に同じと、自著の小説を把って宣言に代ふ、亦奇」。

⑫ 明治二十一年十二月七日大阪市東区今橋の経世評論社から毎月二回発行された。池辺三山主筆。第一号は表紙に巻頭言があり、発刊序言、東海散士、池辺の論文、あとに三宅雪嶺、大石正巳、依田学海、国分青厓などの短文や漢詩を配して全五十七頁であった。雑誌は中立主義を標榜したが、執筆者の顔ぶれから条約改正反対の国粹派であったことは明らかである。号数不詳。

⑬ オスマン・パシャもまた英雄として日本では深い関心を持たれていた人物であり、柴自身も雑誌『経世評論』（前掲）創刊号に執筆した「欧羅巴に心酔ス」という論説でオスマン・パシャを取り上げている。

⑭ 鈕叔平は、『佳人之奇遇』四編に序文「百字引」を寄せており実在の人物であることが確認される。また柴は、雑誌『経世評論』第十号（明治二十二年四月十九日）において「與叔平鈕書」を執筆しており両者の交遊が知られる。

⑮ 柳田前掲書。同時代の雑誌『国民之友』批評欄においても『佳人之奇遇』に対する同様の評価がみられる。

⑯ 既に柴は『佳人之奇遇』自叙において「蓋シ皇天ノ仁慈ナル猶ホ且ツ万人ノ所望ヲ満タスコト能ハス、何ソ独リ散士ノ佳人之奇遇ニ疑ハンヤ、故ニ読者ノ評論ハ閑スル所ニアラサルナリ、平意虚心文字ニ拘泥セス全編ヲ通覽シテ微意ノ存スル所ヲ誤ル勿クンハ幸甚」と述べている。